



通
信

NO. 11
68, 12

東京教育大學

教育系の里での学長講話 //

学長選が迫っている。すでに自度も明らかにして来た様に、今回の学長選は、これまでの筑波變改の過程で生じた學内の諸对立と権威派の抬頭によつてうまくとり結び、二つまでの「移転推進」＝M、P、決起、M、P委設置の既成事態を默認してしま、新たに学園体制へと繋くものに他ならない。

候補者、三輪、林の対立が主観的にいかに、激しいものであつてか、所詮彼らの対立は、團體をめぐるこの民主的本性か、尊重か否かの対立でしかない以上、筑波移転促進の既成事態とのものを認めてしまふことは間やまい道理であろう。

あるならば、我々は今度の学長選と、次の様に想定されるだろう。「筑波移転」との様な手続きをへて進めるかの選挙である。

ところが、この様な学長選の本質を認めることの出来ない民青系諸君は、「学長選の性格と、民主的学年選舉のか否か」という二題に、「民主的（ビジョア）な候補のしりとり」としている。彼らの根本的な誤りは、次の点にある。

すなはち、大學管理機関の一環である学長に対する批判的觀対を一切欠落してゐることである。アルジヨア社会だれの一環としての學内管理機関として学長（制）ととらえること、当然にも我々の状況分析は、学長選を経じて一生いかなる支配階級の範囲が遺漏しているのかということを裏軸として、なされなければならないわけだが、民青諸君にとっては、相手そのものは、超階級的なもの、或は、一大學外団体との必須の連絡機關であるが故に、それを誰が担うかが問題にしかなりえず、候補者が「民主的否か」ということに注目が取られていくるのである。

次の誤りは、その「民主的か否か」という問題の上に立つてゐる。それは二題において誤つてゐる。

一つは、度々述べて来たことであるけれども、学長という地位は、その官能的基盤と機能から見て、個人的傾向が左右されるものではないとまことに承知であることを、オニには現在、我々が直面している政府支配階級の文教政策、或は、個々の

学園斗争では、すでに「民主的」と言わぬ傾向や、意識性に依拠することによっては粉砕しうることの出来ない段階に入つてゐることに対しは無知である。

そのことは、様々な學園斗争における國家权力の行使によつて示される。「民主的」と「の由」などが

その様な权力の発動の前にいかに無力であるかといふことを、我々は「さりと確認しなければならない。おろそか「民主的意識」は、「とにかく暴力はいけない」「話し合い」とい形で、自身を解体するという反動的役割しか果せないものである。

勿論、學内鬭争を無視したり、文書監査など、非民主的闘争は全く犯罪的にちがいまいのだが、政黨をいかに解散したが、目標をどうだけ獲得したかと、二つことと切りはあつれて、「民青」としても極めて緩慢な形式性という点のに対する忠誠を叫くでも、それは風呎の圓形に過ぎないのだ。

二カ族な誤れる状況から、民青諸君は、学長選と、「民主的学長を選ぼう」という風くやしくはなし、一般的な「民主的」学長選出をとどめ、いつ大鮮魚と出していく。

しかも、学生と、教授陣への応援部隊に歪曲する傾向を断固拒して、筑波移転促進派のストレートのモード、学長選を阻止していくねばならない。

本日同日文部省大臣に召集して、学長選阻止の意志一致をかたどつた。

ペスローナン

筑波移転推進のための

學内再編// 学長選阻止//
六、一〇評議会決定撤回
M、P委即時解散

調査費計上阻止//

筑波移転粉砕//
大學自主規制路線粉砕//
大學の帝國主義的改編阻止//

本日の文臨時学生大会

に於いての文部省学交委
結集せよ